



学生の未来展望に対するロールモデルの数の影響

— 家族と家族以外のロールモデルの比較 —

杉浦 仁美・垣口 紗花

要旨 本研究の目的は、高校生と大学生を対象に、身近なロールモデルの数と未来展望との間に関連が見られるかを検討することであった。調査を実施した結果、高校生287名、大学生224名から回答を得た。高校生と大学生を比較した結果、大学生は高校生に比べて家族以外のロールモデルの数が多いことが分かった。また、大学生については、家族以外のロールモデルの数が増えるほど、未来展望の記述数が増加することが分かった。この関連について、学年による違いは見られなかった。以上の結果をもとに、キャリア発達を促進するうえで多様なロールモデルを持つことの意義について議論した。

Abstract The aim of this study was to investigate the relation between the number of familiar role models and the future time perspective among high school and college students. A survey was administered, yielding responses from 287 high school students and 224 college students. A comparison between high school and college students revealed that college students tended to have a greater number of role models beyond their family than high school students. Among college students, an increase in the number of non-family role models was associated with a higher frequency of descriptions regarding future time perspective. There were no significant differences observed across different academic years. Based on these results, we discussed the importance of having diverse role models in fostering career development.

キーワード ロールモデル, 未来展望, キャリア発達

原稿受理日 2024年4月9日

1. はじめに

ライフコースの多様化が進展する現代社会の中で、人々は自身の生涯を豊かにするために価値観やニーズに合った人生プランを探求することが可能となってきた。この多様化の中で、将来の進路を明確に定めることは、個人にとって非常に重要な課題である。しかし、人生の選択に関わる決定プロセスは容易なものではない。特に、就職活動が早期化する現代において、自身の進路をより満足度の高いものにするために、若者たちは早い段階から積極的な行動を起こす必要がある。

このような状況下で、学生たちは、経験が浅いにも関わらず多様な選択肢の中から自身の進路を選択することを迫られている。そのためには、自己の興味や能力、価値観を十分に理解し、それに基づいて適切な進路を選ぶことが欠かせない。さらに、周囲の大人たちの影響も重要である。成功や自己実現を果たした人々の経験や挑戦を知ることによって、学生たちは自身の行動を振り返ったり、模範となる人物を見つけたりすることができる。また、さまざまな背景や経験を持つ人々が存在することで、自身の可能性を広げ、新たな進路やキャリアの選択肢に気づくこともできる。

このような模範となる大人、すなわちロールモデルの存在は、学生たちの進路選択において極めて重要な役割を果たしていると言える。古くからロールモデルの重要性について言及されてきた (e.g., Douvan, 1976; Erikson, 1985) が、その影響力に関する我が国の実証研究はまだ十分とは言い難い。そこで、本研究では周囲の大人との関わりが高校生や大学生の人生設計にどのような影響を及ぼすのか検討することを目的とする。

2. 問題

2.1 ロールモデル

ロールモデル(役割モデル)とは、自分の行動や考え方の模範となる人物のことを指す。この概念は、社会学者の Merton (1957) が、医学生を対象とした社会化の研究において使用したのが由来であると言われている。しかし、一般的にも広く普及したことに伴って幅広い意味を含むようになった。例えば、Savickas (2011) は、ロールモデルを「自分自身を設計するために使う青写真または原型」と述べており、親や教師など個人にとっての特別な存在を想定しているものと考えることができる。一方で、若者の間ではロールモデ

ルとして芸能人やインフルエンサーの名前が挙がることもあり、「『あんな風になりたい』という憧れや目標となるような人物」といった広い意味で用いられることもある(溝口・溝上, 2021)。溝口・溝上(2020)は、ロールモデルを「個人が人生の中で、職業や生き方・人生について考える際、影響を受け、参考にしたあるいは参考にしたいと思う人物」と操作的に定義し、大学生を対象にロールモデルからどのような影響を受けているのかを捉えるロールモデル尺度(Role Model Scale)を作成した。本研究でも、この溝口・溝上(2020)の定義に従うこととする。

ロールモデルがステレオタイプの減少、アイデンティティの形成、パフォーマンスの向上などの様々な側面で良い効果を持つことは、学生対象(Paredes, 2014; 三和・長峯・湯立・海沼・浅山・外山, 2021)、社会人対象(Bosma., Hessels, Schutjens, Van Praag, & Verheul, 2012; 林田, 2023)のいずれの研究においても広く支持されている。その影響メカニズムについては、Gibson(2004)が2つの理論的背景を指摘している。一つは、社会的役割への同一化に関する理論である(Bell, 1970; Katz & Kahn, 1978; Slater, 1961)。これらの理論において、人は、態度、行動、目標、または地位の望ましさを点で、何らかの類似性を感じる人々に惹かれ、観察と模倣を通じてその類似性を高めようとすると言われていた。もう一つは、社会的学習の側面を強調するモデリングに関する理論である(Bandura, 1977b; Miller & Dollard, 1941; Wood & Bandura, 1989)。社会的学習理論では、個人がモデルに注意を払うことが新しいタスク、スキル、規範を学習するのに役立つと示唆している。つまり、人は、ロールモデルとなる他者の行動や価値観に影響を受け、それを観察・模倣することを通して自己の行動や考え方を形成し、それが新たなスキルや価値観の獲得に繋がっていると考えることができる。

2.2 ロールモデルとキャリア発達

ロールモデルの影響は幅広い層を対象にしており、特に組織内でのキャリアパスを考えるうえでの影響に着目するものが多い。しかし、近年では学生のキャリア発達における影響にも注目されている。大学生を対象とした国内の研究をみていくと、溝口・溝上(2020)は、大学生1～4年生を対象に調査を行い、ロールモデルを持っている群と持っていない群を比較した。その結果、キャリア成熟、進路不決断、キャリア選択自己効力感において、概ねロールモデルを持っているほうが良いことが示された。また、ロールモデルの類型化を行い、「憧れタイプ」、「師匠タイプ」、「とりあえずタイプ」、「統合タイプ」、「反面教師タイプ」の5タイプの存在を示唆した。湯口(2020)は、大学1,2年生を対象とした

調査で、ロールモデルとレジリエンス、そしてキャリア探索の影響過程を検討した。なお、この研究でのロールモデルは、レジリエントな人物に限定しており、「危機的な状況に出会った時に、立ち向かっていける人」など5種類の対象に出会ったどうかを6件法で回答させている。その結果、ロールモデルと、自分について考え評価する“自己探索”に直接の影響があること、そして、ロールモデルがレジリエンスを介して、職業世界について情報を得る“環境探索”に影響を及ぼすことが明らかになった。

一方、高校生を対象とした研究では、溝口・酒井・河井(2022)が、高校1年から高校3年にかけて縦断調査を行っている。この調査では、交互遅延効果モデルを用いてキャリア発達にロールモデルの獲得に先行する要因であることを明らかにした。つまり、ロールモデルがいることによってキャリアの見通しが立つというよりも、キャリアの見通しが立つことによってロールモデルの獲得に繋がるのだということが示唆された。また、向田(2018)は公立高校の1年生を対象とし、将来像を自由記述形式で聴取することにより、ロールモデルの有無と将来像の関連を調査した。その結果、ロールモデルが1名以上いる生徒は、いない生徒よりも将来像の具体性が高いことが明らかになった。ロールモデルの数についても検証しているが、将来像との間に有意な関連はみられなかった。

以上の研究から、高校生・大学生のいずれにおいても、ロールモデルを持つことがキャリア発達において有効であることが分かる。特に学生においては、将来の見通しを立て、今後の進路に関する選択肢を広げるという点で重要な働きをしていると考えられる。しかし、以下の2点については、まだ十分に明らかになっていないと言えない。

まず、1点目はロールモデルの数および種類の効果である。ロールモデルの影響を検討する多くの研究では、ロールモデルの存在を「いる／いない」の2値で捉えている。もしくは、ロールモデルが“たくさん”いるかどうかという主観的評価に基づいて検討している。前述したとおり、ロールモデルの機能として、先人の多様な生き方を知ることで自分の将来の選択肢が増えることに繋がるという点を考えるのであれば、ロールモデルの数が増えるほどキャリア発達に対してより有効である可能性が考えられる。向田(2018)の研究では、記述数を指標とすることでロールモデルの客観的な量の効果についても検証しているが、その影響は有意ではなかった。ただし、この調査では、ロールモデルに架空のキャラクターのような実在しない人物や、ミュージシャン・アスリートといった、実在はするが人となりや価値観等の多くを知るには物理的距離の遠い人物も含まれている。対象の生き方や考え方を自分自身のキャリアに取り込むためには、メディアを介して一方的に提供される情報だけではなく、自分と同じ世界でリアルな現実を生きる姿を観察でき、時

にはその対象とコミュニケーションを取ることも必要だと考えられる。よって、ロールモデルの対象を身近な大人に限定して検討をしてみる必要があるだろう。また、身近な大人として最も想起されるのは「家族」であり、両親の存在をロールモデルとして挙げる者も多い（溝口・溝上, 2020）。ただし、親と同じ職業を選択する学生は近年では少数派⁽¹⁾となっており、自分が今後進んでいくキャリアの選択肢を広げるという点では、家族と家族以外のロールモデルの影響を分けて考える必要もある。

2点目は、ロールモデルが仕事だけではなく、その先の人生の展望にどこまで影響しているのかわかなくなっている点である。比嘉・高良・岡本（2005）は、「意味ある他者」の存在が、大学生の未来展望に影響することを示唆している。「意味ある他者」とは、個人の生活の中でその存在自体が、あるいはその言葉がある重要な意味を持ち、個人の生活に影響を及ぼす他者と定義されている。ロールモデルとよく似た概念であるものの、ロールモデルが「職業や生き方・人生について考える際に参考にする人物」とやや限定的であるのに対して、「意味ある他者」は「個人の生活で重要な意味を持つ者」と、友達や恋人なども含む、より広い範囲での影響力を想定した人物と考えることができる。また、未来展望とは、時間的展望の一種であり、「ある一定の時点における個人の心理学的未来についての見解の総体」である。つまり、今後自分がどのような人生を送るかのイメージであり、アイデンティティ形成の一側面と考えられている。大学生を対象とした調査の結果、「意味ある他者」項目の得点が高い、すなわち様々な側面に「他者との出会い」がある者ほど、未来展望とより関連していることが明らかとなった。様々な側面において意味ある他者との出会いがある者は、例え未来に対して不安を抱くことがあったとしても、出会った他者をモデルにしたり、実際に関わり合うことの中でそれを払拭し、未来展望を築くことができるのだと述べられている。この研究の結果から考えると、「意味ある他者」の一部であるロールモデルの存在は、キャリアに関連する展望だけではなく、定年後も含めた人生全体の未来展望にも影響する可能性があると言える。以上の疑問を明らかにするために、本研究では、家族以外の、実在するロールモデルが学生の未来展望に影響するかどうかを検討する。

2.3 本研究の目的と仮説

本研究では、高校生と大学生を対象に調査を行い、ロールモデルと未来展望との間に関

(1) 参鍋（2014）によるSSMデータおよびJGSSデータの分析によると、世襲の割合は1955年は43%であるのに対して、2005年には10%となっている。

連が見られるかを検討することを目的とする。なお、ここでのロールモデルは実在する人物に限り、家族と家族以外のロールモデルの違いにも着目する。

本調査で対象となる高校は、大学進学率が高く、就職について大学卒業後を目標としている者がほとんどである。溝口・酒井・河井(2022)に基づいて考えると、ロールモデルを意識するのはキャリアの見通しを立てることが前提であるため、高校生よりも、就職活動中もしくは就職活動を目前に控えた大学生のほうが、ロールモデルの数が多いことが予想される。また、大学生は、高校生に比べてインターンシップやアルバイトなどの就業体験が増え、家族以外の社会人と接する機会が多くなる。これらは、キャリアの選択肢を増やし、将来像を具体化するのに役立つだろう。よって、高校生よりも大学生のほうが、家族以外のロールモデルの数が多いと予測する(仮説1)。また、家族以外で関わる大人の数が多い、すなわち家族以外のロールモデルの数が多いほど、未来展望が具体的にになると予測する(仮説2)。さらに、この関連は、就職活動が本格化していく学年⁽²⁾、つまり3、4年生になるにつれて強くなると予測する(仮説3)。

3. 方 法

3.1 調査

調査対象者

高校生サンプル 関西の市立高校に在籍する高校2年生と高校3年生を対象に、キャリア教育の一環として授業時間内に質問紙を配布した。調査は匿名で実施され、統計的に処理されること、研究目的のみに使用し成績などの面で不利益を被ることはないことを書面で説明した。有効回答数は287名(平均年齢=16.34歳, SD=0.53, 男性132名, 女性147名, 不明2名)であった。内訳は、2年生252名, 3年生28名, 不明7名であった。

大学生サンプル 関西の私立大学に在籍する大学2年生から4年生を対象に質問紙調査を実施した。質問紙の配布方法は2種類のパターンがあり、ゼミや講義内で配布し、その場で回答するパターンと自宅に持ち帰って回答するパターンがあった。有効回答数は224名(平均年齢20.44歳, SD=1.02, 男性113名, 女性102名, 不明9名)であり、5つの学部 of 学生から回答を得た。内訳は、2年生63名, 3年生90名, 4年生71名であった。

(2) 調査は2023年6～8月にかけて実施された。そのため、4年生の中には就職活動を終えた者も含まれている。

調査項目

(1) **ロールモデル** 溝口・溝上(2020)が作成したロールモデル尺度(Role Model Scale)を参考に独自に作成した。このロールモデル尺度は、対象がロールモデルからどのような影響を受けているかを捉えるために開発されたものであるが、本調査ではロールモデルとなる人物と対象との間柄や関係性を把握する必要がある。そのため、尺度の各因子から因子負荷量の高い1～2項目を選択し、その内容に該当する人物を記入してもらう形に変更した。回答は、A～Jの選択肢を提示し、その中から選択した(図1)。

(1)〇〇のように生きたい	() () () () ()
(2)〇〇は自分にない考え方や価値観をくれた	() () () () ()
(3)〇〇は相談に乗ってくれる	() () () () ()
(4)〇〇がしていたので、自分も同じことを始めた	() () () () ()
(5)〇〇のような言動は控えようと思う	() () () () ()
(6)悩んだとき、〇〇の意見をもらいたい	() () () () ()

【選択肢】

A 父	E 家族以外の20代の人	I 家族以外の60代の人
B 母	F 家族以外の30代の人	J 家族以外の70代以上の人
C 兄、姉(20歳以上)	G 家族以外の40代の人	
D 祖父、祖母	H 家族以外の50代の人	

図1 ロールモデルの項目、回答方法、選択肢

回答者自身が持つロールモデルのイメージに影響を受けないように、「ロールモデル」という単語は一切使わず、「あなたが現在関わっている、もしくは関わったことがある身近な大人」について考えるよう教示した。他に、①自分よりも年上の20歳以上の人物で、アニメのキャラクターや芸能人、スポーツ選手は含まないこと、②年齢が分からない場合は、最も近いものを選ぶこと、③同じ人物は1つの項目に1人だけ書くこと、④同じ選択肢で人物が異なる場合は、「F②」のように英字の後に数字を書くこと、⑤1人も思い浮かばない場合は、最初の回答欄に×(バツ)を記入することの5点を注意点として明示した。

(2) **ロールモデルとの関係性** 上記で回答したロールモデルのうち、家族以外のロールモデルとして挙げられたすべての人物について、その相手との関係性を尋ねた。この質問は、時間の都合上、大学生のみに対して実施した。選択肢は、小学校の先輩・先生、中学校の先輩・先生、高校の先輩・先生、大学の先輩・先生、部活の先輩・先生、サークルの先輩・先生、職場の上司・先輩、親戚、塾・予備校・家庭教師の先輩・先生、習い事の先輩・先生、家族の知人、近所の知人、その他の13個であった。

(3) **未来展望** 白井(1997)が作成した出来事検査をもとに作成した。回答者が将来、20代以降の各年代で実行すると思うことをスラッシュで区切って記入した。出来事と出来事の間には/ (スラッシュ)を入れて区切り、1つの文で複数の出来事を書かないことを説明した。学校や仕事のことも、プライベートのことも構わないこと、何も思い浮かばない場合は、空白のままでも良いこと、同じ内容は1度だけ書くようにすることを教示した。参加者は、20代、30代、40代、50代、60代、70代以上の各回答欄に自身の回答を手書きで記入した。

時間制限

授業内で調査を実施する際には20分の回答時間を設け、早く回答が終わっても時間まで考え続けるように指示した。持ち帰り調査の場合は封筒の表面に同様の説明書を添付し、回答開始時刻と回答終了時刻の報告を求めた。

4. 結 果

分析には、HAD17_300 (清水, 2015) と R-4.3.1 を用いた。表1に、今回の調査で用いた主要な変数の記述統計量および変数間の相関関係を示している。なお、ロールモデルについては、異なる質問で同じ人物が挙げられていた場合は1人とカウントし、重複を避けた。表1を見ると、ロールモデルとして挙げられた人数の平均は4.83名であり、家族が2.69名、家族以外が2.15名であった。また、未来展望については平均10.18個の記述があり、20代の記述が最も多く、年代が上がるにつれて記述が減っていた。ただし、おそらく定年直後を想起したであろう60代については、その前後の50代、70代に比べて記述が多かった。

表 1 主要変数の平均値，標準偏差および相関係数

変数名	平均値	標準偏差	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 学校 (高校=1, 大学=2)	1.44	0.50												
2 年齢	18.16	2.18	.93**											
3 性別 (男性=1, 女性=2)	1.52	0.54	-.05	-.06										
4 ロールモデル (家族)	2.69	0.95	.01	.02	-.01									
5 ロールモデル (家族以外)	2.15	1.78	.21**	.21**	-.04	.00								
6 ロールモデル (合計)	4.83	2.02	.19**	.19**	-.04	.47**	.88**							
7 未来展望20代	4.49	2.46	-.22**	-.25**	.13**	.10*	.12**	.15**						
8 未来展望30代	2.10	1.62	-.04	-.04	.05	.07	.17**	.18**	.46**					
9 未来展望40代	0.86	1.14	.05	.05	.06	.04	.15**	.15**	.29**	.60**				
10 未来展望50代	0.75	1.06	-.01	-.01	.09*	.01	.11*	.10*	.36**	.52**	.62**			
11 未来展望60代	1.22	1.13	-.14**	-.15**	.08*	.06	.11*	.12**	.30**	.38**	.40**	.43**		
12 未来展望70代~	0.78	0.95	.06	.06	.03	.11*	.08*	.12**	.22**	.33**	.43**	.45**	.38**	
13 未来展望合計	10.18	6.00	-.12**	-.13**	.12**	.10*	.18**	.21**	.75**	.79**	.73**	.74**	.63**	.57**

仮説 1 を検討するため，ロールモデルの人数を従属変数とし，学校（高校／大学）とロールモデルの種類（家族／家族以外）を要因に入れた 2 要因の分散分析を実施した。その結果，学校の主効果 ($F(1,509)=18.66, p<.001$)，ロールモデルの種類の主効果 ($F(1,509)=31.17, p<.001$)，交互作用 ($F(1,509)=17.00, p<.001$) がいずれも有意であった。下位検定 (Holm 法) の結果，高校においてロールモデルの種類の主効果が有意 ($t(509)=7.33, p<.001$) であり，家族のロールモデルの数が家族以外のロールモデルの数よりも多かった (図 2)。これは仮説 1 を支持する結果であった。

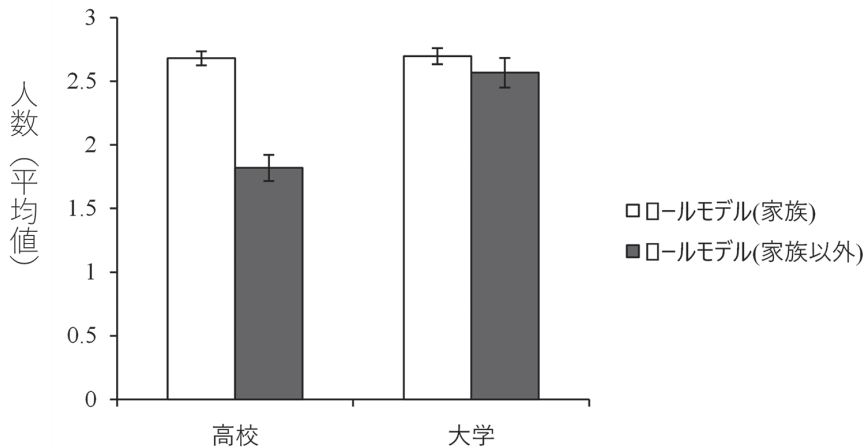


図 2 学校×ロールモデルの種類に関する交互作用

続いて，仮説 2 を検討するため，高校・大学のそれぞれについてロールモデル（家族以外）の数と未来展望の数（合計）の相関係数を算出した (図 3)。その結果，高校では $r=.14$ ($p<.05$)，大学では $r=.28$ ($p<.001$) であった。どちらも有意ではあるものの，相関係数

の大きさをみると高校ではほとんど相関関係はなく、大学においてやや相関関係があると考えられることができる。なお、これらの結果は、ロールモデル（家族）を統制変数に入れても変わらなかった（高校： $r=.15$, $p<.05$, 大学： $r=.28$, $p<.001$ ）。

また、ロールモデル（家族）の数と未来展望の数（合計）についても相関係数を算出した。その結果、高校では $r=.12$ ($p<.05$)、大学では $r=.08$ (*n.s.*)であった。ロールモデル（家族以外）を統制変数に入れても結果は変わらなかった。以上から、仮説2は大学生のみで支持されたとと言える。なお、未来展望の数（合計）について、学校（高校／大学）を要因としたt検定を実施したところ、有意な差 ($t(509)=2.67$, $p<.01$) がみられ、高校生の回答数 ($M=10.80$, $SD=5.91$) は大学生の回答数 ($M=9.38$, $SD=6.04$) よりも多いことが分かった。

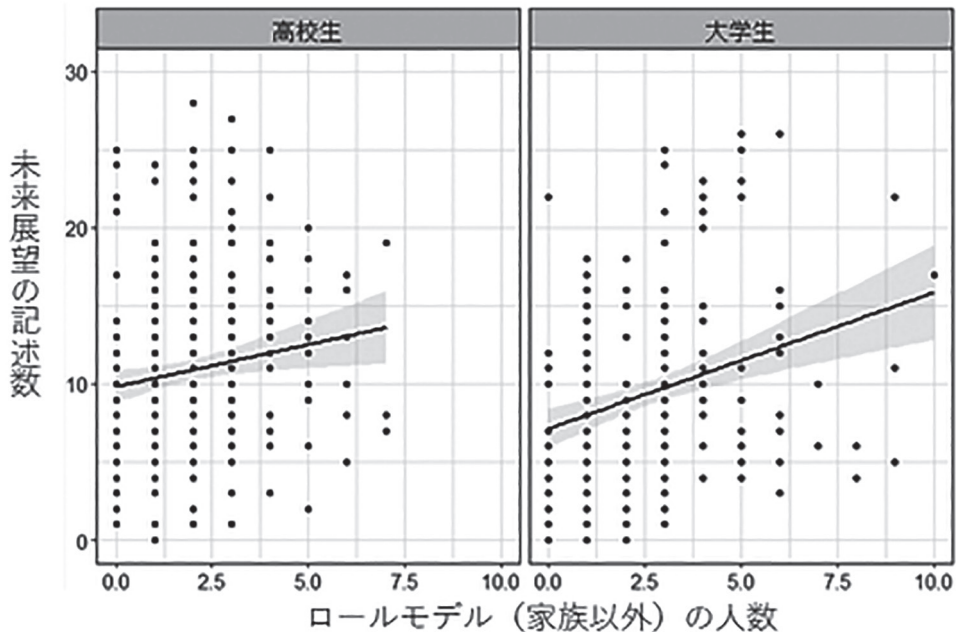


図3 未来展望（合計）とロールモデル（家族以外）の相関関係

仮説3を検証するため、大学生サンプルを用いて学年が上がるごとに家族以外のロールモデルの数と未来展望の数の関連が強くなるか検討した。学年ごとに相関係数を算出したが、学年による違いはみられなかった（2年生： $r=.28$, $p<.05$, 3年生： $r=.26$, $p<.05$, 4年生： $r=.27$, $p<.05$ ）。よって、仮説3は支持されなかった。

最後に、追加分析として、どのような関係性の人物が家族以外のロールモデルとして挙

がっていたのかを確認するため、ロールモデルの人数を従属変数、関係性を要因に入れた1要因分散分析を実施した。なお、この質問は高校生に尋ねることはできなかったため、大学生のみを分析の対象としている。その結果、関係性の主効果が有意 ($F(12, 2676) = 23.36, p < .001$) であり、その他を除くと、職場の上司・先輩が圧倒的に多く、次に高校や大学の先輩・先生が多く挙げられていることが分かった（図4）。

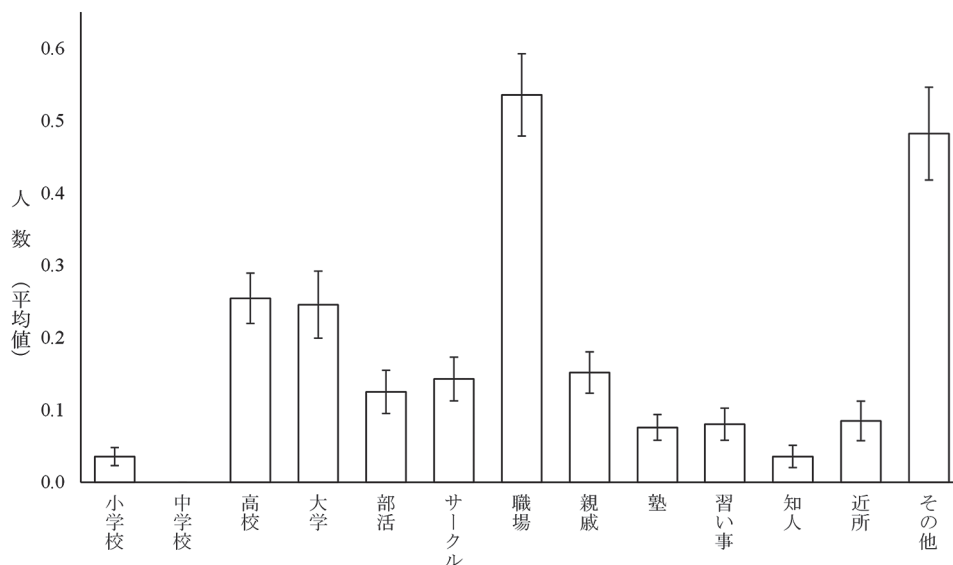


図4 家族以外のロールモデルとの関係性

5. 考 察

本研究の目的は、高校生と大学生を対象に調査を行い、実在する、家族以外の身近なロールモデルと未来展望との間に関連が見られるかを検討することであった。まず、仮説1についてみていくと、大学生は高校生に比べて家族以外の大人をロールモデルとしてより多く挙げていることが分かった。これは仮説1を支持する結果である。第59回学生生活実態調査（全国大学生生活協同組合連合会，2024）によると、大学生のアルバイト就労率は74.5%であり、マイナビキャリアリサーチ Lab. (2024) による大学3年生および大学院1年生を対象とした調査では、インターンシップや仕事体験に参加したことがある割合は85.7%であった。現在ではほとんどの大学生がアルバイトやインターンシップを経験しており、大学入学後にこれらの機会を通して社会人の先輩と直接接触した経験が、家族以外

のロールモデルの形成に繋がったのではないかと考えられる。

続いて、仮説2について、家族以外のロールモデルの数が多いほど、未来展望が具体的になると予測したが、この仮説は大学生のみにおいて支持された。高校生において相関が低かったのは、高校生と大学生の未来展望の記述内容の違いに原因があるかもしれない。高校生の未来展望の回答数は、大学生の回答数よりも有意に多く、抽象的であったり、希望に近いものも含まれていた。一方で、大学生は就職活動の最中、または就職活動を目前に控え、より具体的に自分の将来について考える機会が増えたため、実現可能性の高い内容を回答していたことから記述数が少なくなっていたのではないかと考えられる。よって、本研究で想定していたような、家族以外のロールモデルから影響を受けて築かれた未来展望の数は、実際には高校生よりも大学生において多かったと推測される。

仮説3について、仮説2の関連は大学生の中でも就職活動が本格化する3、4年生において特に強くなると予測したが、学年による違いは見られなかった。大学1、2年生の時期にアルバイトを開始する学生が多いこと、また、追加分析において職場の上司・先輩が家族以外のロールモデルとして多く挙げられていることの2点を踏まえて考えると、大学生になり、初めて就業した体験が自分のキャリアへの意識を高め、そこで出会った上司や先輩から強く影響を受けていたのではないかと考えられる。よって、学年というよりもアルバイトや仕事体験を初めて行った時期が重要であると推測される。

以上の考察を踏まえて、本研究の理論的示唆と実践的示唆について述べる。理論的示唆については、キャリア発達におけるロールモデルの数および質の効果が明らかになった点が挙げられる。従来の研究では、ロールモデルの数の効果については不確かであったが、少なくとも未来展望という点において、家族以外のロールモデルの数が効果を持つことが示唆された。つまり、家族以外の多様なロールモデルを持つことが、将来の選択肢を広めることに繋がっていると考えられる。この結果は、キャリア発達におけるロールモデルの影響過程を解明することに役立つだろう。次に、実践的示唆については、学生における家族以外の身近な大人との接触機会の重要性を明らかにすることが出来た点である。キャリア教育において、インターンシップ等の活動を通じて実践をする機会や、実際に働く大人から経験やアドバイスを聞く機会も多い。本研究の結果は、こうした取り組みが有益であることを支持するものである。また、高校・大学における先輩・先生の影響力も無視することはできない。学生にとって身近なこれらの大人達が、積極的に自身の経験や価値観を学生に示し、時には助言を与える等の支援することで、学生がキャリアについて深く考えるきっかけになると言うことができるだろう。

本研究で、家族以外の大人と積極的に関わることが未来展望を具体化する可能性が明らかとなった。しかし、少なくとも以下の2点の課題と1点の応用上の注意点が考えられる。まず1つ目に、ロールモデルの数と未来展望との間の因果関係については明らかになっていない。未来展望が明確であるほど、その展望に近い人物を探し出し、参照しているという逆の因果の可能性も考えられる。これを明らかにするためには縦断調査を実施して、大学入学時点と就職活動開始時点でのロールモデルの数の変化が、就職活動開始時点での未来展望に影響するかどうかを検討する必要があるだろう。

2点目は、未来展望の数を正確に把握できていないかもしれないという方法上の問題である。今回は質問紙調査であったが、すべての調査を授業内で実施することは出来なかったため、一部は持ち帰り調査となった。持ち帰り調査の場合、制限時間20分を守っていたのかを確かめる術がなく、未来展望を回答する際に、数個の答えを記入して満足した段階で回答を終えていた可能性も捨てきれない。本調査を高校で実施した時のように、回答時間をすべて管理して実施する必要があるだろう。

最後に、応用面での注意点について述べる。本研究の結果は、家族以外の大人との積極的な関わりを推奨するものであるが、その一方でトラブルに巻き込まれるリスクも増加する可能性がある。近年では、インターネットを通じて様々な人達とコミュニケーションを取ることが可能となったが、詐欺や性犯罪などSNSをきっかけとする多様なトラブルが増加している。このようなトラブルに遭遇した場合、心身の健康や人間関係に大きな影響を及ぼしてしまうことが危惧される。そのため、キャリア教育に携わる者は、その危険性を認識させて、学生がトラブルを避けるための知識やスキルを身につける手助けをすることも重要である。若者が身近な大人たちと健全な人間関係を築き、安全に成長するための環境が整備されることが期待される。

参 考 文 献

- Bandura, A. [1977] *Social learning theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Bell, A. P. [1970] Role modelship and interaction in adolescence and young adulthood. *Developmental Psychology*, 2, 123-128.
- Bosma, N., Hessels, J., Schutjens, V., Van Praag, M., & Verheul, I. [2012] Entrepreneurship and role models. *Journal of economic psychology*, 33(2), 410-424.
- Douvan, E. [1976] The Role of Models in Women's Professional Development. *Psychology of Women Quarterly*, 1(1), 5-20.
- Erikson, E. H. [1985] *Childhood and society (35th Anniversary Ed. ed.)*. New York: W.W. Norton.
- Gibson, D. E. [2004] Role models in career development: New directions for theory and research. *Journal of vocational behavior*, 65(1), 134-156.

- 林田聖子 [2023] 「助産師の職業的アイデンティティ形成に関する文献レビュー」『聖路加国際大学紀要』, 9, 35-44.
- 比嘉麻美子, 高良美樹, 岡本祐子 [2005] 「「意味ある他者」の存在と大学生の未来展望との関連」『広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要』, 4, 78-89.
- Katz, D., & Kahn, R. L. [1978] *The social psychology of organizations*. New York: Wiley.
- マイナビキャリアリサーチ Lab. [2020] 「2025年卒 大学生 広報活動開始前調査」https://career-research.mynavi.jp/research/20240222_70531/ (2024年4月9日最終アクセス)
- Merton, R. K. [1957] *Social Theory and Social Structure*. New York: The Free Press. (マートン, R. K. 金沢実 (訳) [1961] IX 準拠集団と社会構造の理論 (つづき) 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎 (訳) 社会理論と社会構造 (pp.256-350) 東京: みすず書房.)
- Miller, N. E., & Dollard, J. [1941] *Social learning and imitation*. New Haven, CT: Yale University Press.
- 三和秀平, 長峯聖人, 湯立, 海沼亮, 浅山慧, & 外山美樹 [2021] 「身近な役割モデルの存在と英語学習の関連——制御焦点に着目して」『パーソナリティ研究』, 30(2), 49-51.
- 向田久美子 [2018] 「高校生にとってのロールモデルと将来像」『日本心理学会第82回大会発表論文集』, 15, 835.
- 溝口侑, 酒井淳平, & 河井亨 [2023] 「高校生のロールモデルとキャリア発達の関係についての縦断的検討」『日本教育工学会論文誌』, 46 (Suppl.), 133-136.
- 溝口侑, & 溝上慎一 [2020] 「大学生のキャリア発達とロールモデルタイプの関係——ロールモデル尺度 (RMS) の開発の試み——」『青年心理学研究』, 32(1), 17-36.
- 溝口侑, & 溝上慎一 [2021] 「キャリア発達におけるロールモデルに関する研究の今後の課題と展開——坂井敬子氏のコメントに対するリプライ——」『青年心理学研究』, 33(1), 69-73.
- Paredes, V. [2014] A teacher like me or a student like me? Role model versus teacher bias effect. *Economics of Education Review*, 39, 38-49.
- 参鍋篤司 [2014] 「職業世襲—長期無業・失業, 人的ネットワーク, 幸福度への影響」『日本労働研究雑誌』, 56(10), 61-74.
- Savickas, M. L. [2011] *Career counseling*. American Psychological Association, Washington, D.C. (マーク・L・サビカス (著), 日本キャリア開発研究センター (監訳), 乙須敏紀 (訳) [2015] キャリア・カウンセリング理論, 福村出版)
- Savickas, M. L. [2011] *Career counseling*. American Psychological Association, Washington, D.C. (マーク・L・サビカス (著), 日本キャリア開発研究センター (監訳), 乙須敏紀 (訳) [2015] キャリア・カウンセリング理論, 福村出版)
- 清水裕士 [2016] フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案『メディア・情報・コミュニケーション研究』, 1, 59-73.
- 白井利明 [1997] 「時間的展望の生涯」『発達心理学』, 勁草書房
- Slater, P. [1961] Toward a dualistic theory of identification. *Merrill-Palmer Quarterly*, 7, 113-126.
- Wood, R., & Bandura, A. (1989). Social cognitive theory of organizational management. *Academy of Management Review*, 14, 361-384.
- 湯口恭子 [2020] 「ロールモデルとレジリエンスがキャリア探索に及ぼす影響—大学1.2年生を対象として—」『近畿大学短大論集』, 53(1), 51-63.
- 全国大学生活協同組合連合会 [2021] 「第59回学生生活実態調査」https://www.univcoop.or.jp/press/life/pdf/pdf_report59.pdf (2024年4月9日最終アクセス)